

ナイジェリア作物遺伝資源紀行

芦澤正和

元野菜試験場室長／元全国農業協同組合連合会技術主管

秋濱友也

アグリバイオ研究所／元明治大学教授

地球上の植物の野生種が豊富な地方と、栽培植物の起源地とは必ずしも一致しない。アフリカ大陸にはおよそ13000の種が存在するにもかかわらず、ごくわずかの栽培植物が生産されているにすぎない。たとえば、エチオピア原産のパンをつくる原料となるテフ、種子から食用油をとったり石鹼をつくったりする油料作物のニゲル、バナナ的一种、コーヒーの樹、モロコシ等に加え、カラハリ砂漠に隣接する地域ではスイカの栽培化が始められたといわれている。

ナイジェリアはアフリカ大陸の西の突出部の付け根、赤道の北側に位置し、緯度は北緯3～15度、経度は東経4～14度にある。面積は日本の2.5倍、人口は1億人を超え、経済力はブラック・アフリカ第1位である。石油を初め、天然資源に恵まれ、農産物では米、トウモロコシ、ソルガム、イモ類、マメ類など西アフリカーの生産を誇っている。

近年、首都は大西洋岸のラゴスから内陸部のアブジャに遷都した。ハウサ・ラワニ、イボ、ヨルバの三大民族を主体に、大小100を超える民族が住んでおり、食用植物は多種多様である。



旧首都ラゴスから北へ100kmのところにイバダンの町がある。ここはアフリカ人が建設した古都で、国際熱帯農業研究所がある



熱帯雨林から北へ行くと写真のような疎林帯が続く。雨量も少なくなり蟻塚なども見られる



疎林帯から草原帯へ、そしてサバンナへ——。そこには神聖な樹、バオバブが大事に保全されている



さらに北へ進むとサバンナが開け、サハラ砂漠の南限に連なる



ナイジェリア中央部に標高2000mのジョス高原がある。
避暑地として栄え、市場には高原野菜が豊富にある



ジョス高原の市場では立派な白菜が並んでいる



ナイジェリアの主食はトウモロコシとヤマイモである。
写真のようにヤマイモは巨大な柱状で20～50kgもある。
芋をそのまま食べたり、乾燥・製粉してパン状にして食べる



果菜類の収集では、植物体の記載・計測後、種子を取り出し洗浄し、
水分がとれるまで乾燥作業が続く



文化はつる暗黒大陸アフリカというのは支配者がつくった妄想で、各地に古い遺跡が
残っている。北部のカノ遺跡は、かつてのカノ王国の城を再現したものである



牛が放牧されている。市場へ出荷するときは、
遠い道程を後ろから追いつながら道路をふさいで何時間でも歩いていく



遺伝資源の探索・収集では現地の研究者との協力が不可欠である。
現場での聞き取り調査は通訳・翻訳者を複数たてることもよくある。
質問と答えがチグハグになることもしばしばだ

ナイジェリアはユウガオや
ヒョウタンの宝庫である。
屋根いっぱいにこうした植物を
這わせた光景に出会うことも



東部サバンナあたりには、野生スイカが見られる。
内部は種子のみで薄い果肉は苦く、家畜も食べない



ユウガオは苦味のないものは食用にしたり、
容器や水瓶として使う



ヒョウタンも多様な形・
大きさのものが広く分布している



サバンナをさらに北へ進むと
原始的な栽培スイカも見られる。
果肉は桃〜薄赤色。ほとんど甘みのないものから、
わずかに甘みを感じるものまで多様性に富んでる



ヒョウタンとユウガオは同種で、食用以外に用途が広く、
あちこちで楽器としても使われている。子供たちが笛を吹いていた



野生スイカの分布と重なり、
多様なCucumis ククミス属
(キュウリ・メロンの同属)の野生種が見られる。
ピンポン球程度の大きさで、未熟果は緑、熟すと黄色になる



ニガウリはアフリカ原産ではないが、ナイジェリア農業研究所の近くにも見られる。雑草のように何かに付着して導入されたのかもしれない



カボチャはナイジェリアの大事な食用植物。家畜の食料でもある。かなり大型で変異も大きい



ヒダウリの種子は大福餅ぐらいの大きさで、きわめて数が多い。種子はタンパク質含量が高く、妊産婦・幼児の栄養源としても優れている



ナイジェリアの東南部で、フルーテッド・バンブキン(ヒダウリ)を初めて発見した。果実は20kgと巨大



ヒダウリの雌花



ナイジェリアに自生しているサウマトココス。果実は砂糖の1000倍の甘さがある。タウマチンとその誘導物質を含んでいる。アメリカ、オランダなどで低カロリー甘味料として研究中である



ヒダウリの雄花

Tomoya Akihama アグリバイオ研究所
〒206-0011 東京都多摩市関戸1-1-5
ザ・スクエア A310 Tel&Fax 042-372-5365
e-mail : akihamat@d9.dion.ne.jp